図書館の立場から
学術成果の品質保証をどう考えるか？

～京都大学図書館機構の構想も交えて～

20 Slides

京都大学附属図書館　研究支援課長
野中雄司

JST/CHORUSオンラインフォーラム：プレプリントをめぐる動向、課題、そして政策的論点
JST/CHORUS FORUM: PREPRINTS – TRENDS, CHALLENGES, AND POLICY CONSIDERATIONS
2026年11月5日（木）
@オンライン　図書館総合展2026

自己紹介

北海道大学
附属図書館
13年
係員10年
係長3年

室蘭工業大学
附属図書館
3年
係長3年

東京大学
附属図書館
4年
係長4年

富山大学
附属図書館
3年
課長3年

京都大学
附属図書館
3年目
課長3年目

現在の所掌

電子ジャーナル
データベース
の整備

デジタル
アーカイブ

図書館システム
含む
システム全般

オープンアクセス
機関リポジトリ

今日は
一図書館職員の
体感的な経験から

ご依頼いただいたもの

【CHORUS、JSTからの依頼】

- プレプリントの普及やオープンサイエンスの進展を図書館としてどのように受け止めているか
- 研究者支援の現場においてどのような課題やニーズを感じているか
- 機関リポジトリや研究成果公開との関係
- AIの発展も踏まえ、図書館に求められる役割がどのように変化しているか
- 今後、図書館としてどのような支援や取組が考えられるか

本日のお話

【学術成果の品質保証とは何なのか？】

- 今日は、プレプリントがお題。
- プレプリントと言えば、知識情報を提供する役割を主として行ってきた図書館からすると、オープンであることを歓迎しつつ、その品質保証、つまり信頼できるかどうかという観点から、その位置付けをどう考えるかという視点が多かったと思う。
- 今日はこの品質保証をテーマとして、図書館職員という立場から現状と今後を考えてみたい。

本日のシナリオ

1. 現状の理解（私なりの…）
2. 図書館ができることは何か？
3. 京都大学図書館機構の取り組み
4. まとめ（今後の図書館の役割を考える）

1

現状の理解

私なりの…

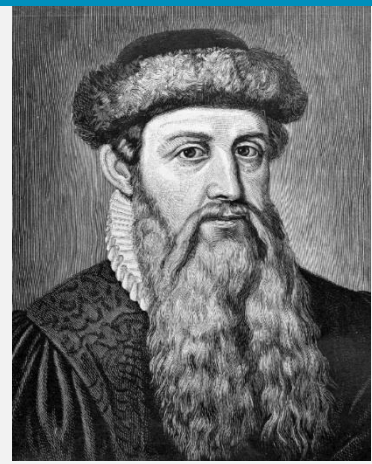
現状の理解（情報爆発と品質保証）

約500年前～20世紀末（グーテンベルク革命～デジタル革命前夜）

第一の情報爆発

- 文字やイメージの大量複製と流通、その消費のシステム
- マスメディアの活躍

→学術雑誌と査読システム（品質保証）の登場　など



グーテンベルク

20世紀末～現在（デジタル革命）

第二の情報爆発

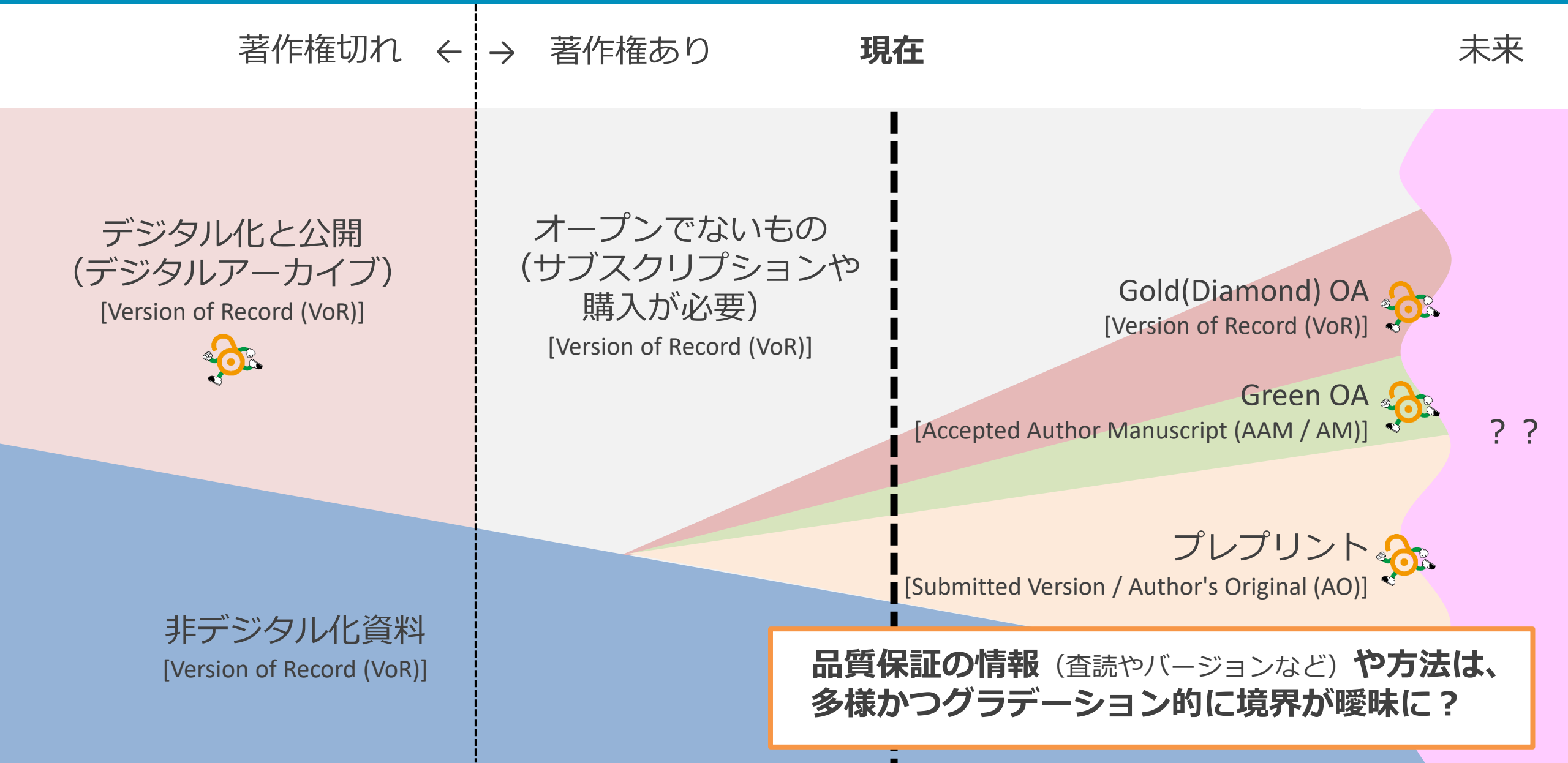
- インターネット出現により、すべての人が発信者になれるように
- デジタル革命による地球規模の情報爆発

→**情報の取捨選択の必要性増大**　など

品質保証がより重要に？

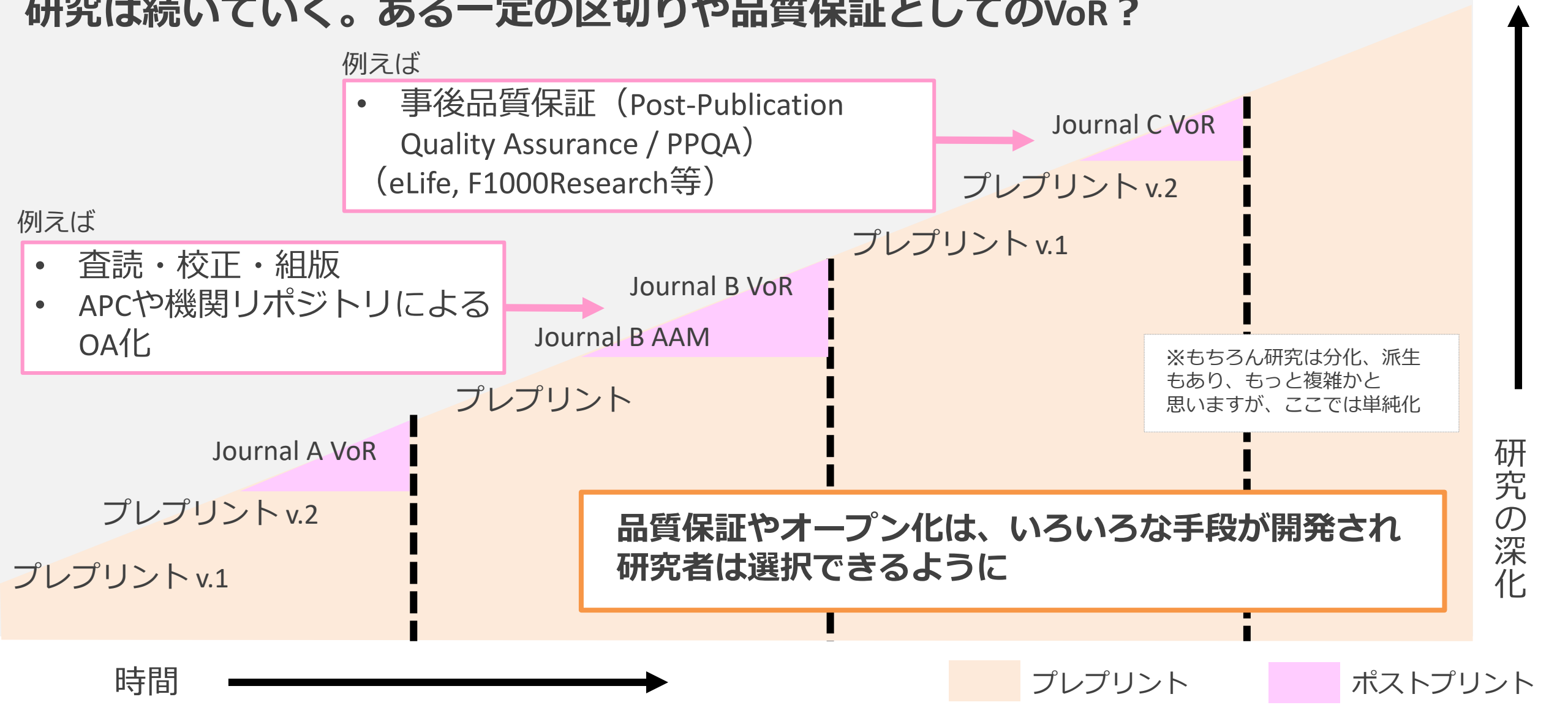
参考：吉見俊哉. (2013). デジタル時代における知識循環型社会の価値創造基盤. https://doi.org/10.1241/johokanri.56.491

現状の理解（知識=ナレッジの総体とオープン化）※超ざっくり



現状の理解（研究の積み上げと品質保証） ※超ざっくり

研究は続いていく。ある一定の区切りや品質保証としてのVoR？



2

図書館ができることは何か？

情報爆発に対して、図書館は何をしてきた？

- 情報の取捨選択のための様々な整備
  → 目録や分類の精緻化、件名やアクセスポイント強化、シソーラス作成、PIDの整備、ライセンス表記、バージョン情報の規格化、などなど

- 特に第二の情報爆発以降、教育も　→情報リテラシー教育
  → 図書館職員は率先して「情報の信頼性」を強調してきた？（例：インターネット上の情報（玉石混交）＜図書）

- Google等大規模検索サービス、生成AIの登場
  → 到達できない有料コンテンツへの補完ナビゲーション、メタデータの整備、オープンナレッジ推進（資料デジタル化、オープンアクセス推進）等、情報の獲得と取捨選択支援に加え、情報の発信支援も

図書館の新たな役割の一つ？

- 知識の取捨選択のための大切な情報である、品質保証の情報や方法はグラデーション的に境界が曖昧な様々な形態へ

⬇

- この状況もあり、大量の情報から必要な知識を取捨選択するためのルールやテクノロジーは進化を続けている。
  - バージョンや査読情報の規格化や、メタデータ記述ルールやサービス（Crossmark等）の整備
  - AI+LLMの登場により、動的メタデータ的に、規格化されていない自然言語を含む各種品質保証情報から「意味」を汲み取って構造化・要約し、読み手に提供するなども可能に？

⬇

図書館の新たな役割の一つ？（続き）

- 取捨選択のため、品質保証の方法や過程の透明性や可視化がより重要になってくるのではないか？
  - 機械的・直観的に判断できる規格化されているバージョン情報などは重要かつ有用だが、限界も？

- さらに、知識発生源である大学が、技術的に直接研究者の発信を支援することもできるようになってきた。大学からの直接発信は、研究者との距離が近く、品質保証情報を詳細に発信することが可能かつ、一定の意味付け（発信元保証や、永続アクセス保証等）が可能であり、その意義も高まってきている？

知識獲得への支援だけではなく、知識発信も含めた知識循環全体に対する支援も図書館は力を発揮できるのではないか

3

京都大学図書館機構の取り組み

まだ構想段階
2026～2027目標

学術書オープンアクセス出版事業（いわゆるLibrary Publishing）

- 商業的な利益が見込みにくい学術書の出版について、大学が出版手段および環境を構築し、研究者の成果公開の選択肢を広げ、その発信を支援する
- コンテンツタイプや分野により様々な品質保証を準備
  - モノグラフ＝査読（ブラインド、オープン等）、学部長の推薦等
  - 資料集、教科書、マニュアル等＝正規教員2人以上の推薦

  など
- 品質保証の方法、過程は極力オープンかつ可視化する

学術雑誌オープンアクセス出版支援事業（Diamond OAJ）

発行元

学内のジャーナル
発行元
（学部、研究会等）
編集委員会

- 約100誌をホスト
- 各編集委員会により様々な品質保証方法を採用しており、KURENAI側からは品質保証の条件は付していない

執筆・投稿

学内・学外研究者

プラットフォーム及びサービス

KURENAI（京都大学学術情報リポジトリ）

KURENAI Journals
(KURENAI内からもリンク)

KURENAI Journals
（KURENAIの子プラットフォーム）

投稿査読システムの提供

出版

CrossRef DOI

HTML(JATS)
PDF

世界中の読者

- （新）投稿査読システムを備えた電子ジャーナルプラットフォームに移行する。
- 品質保証方法は、発行元の目的や考え方により様々
  - 査読あり／なし
  - 投稿は学内者のみ／学外者含む
  - DOAJ収録あり／なし
- 品質保証の方法は、様々でよい
- ただし、取捨選択の助けになるような品質保証方法などは、極力オープンして可視化できるようにしていきたい

4

まとめ
（今後の図書館の役割を考える）

AI時代の知識選択方法のアップデート

- 従来の図書館コレクションにこだわらず、ナレッジ全体に対して、「知りたい時に知ることができる」環境をどう構築するかを常に考えていく必要。ナレッジ全体を見渡せるのは図書館だ！ともっと自負してもいいのではないか。

- 知識へのアクセスを担保、拡大するために、オープンナレッジの推進は重要（もちろん経済性や安全性の観点等から必要な範囲で）

- さらに、地域や学術分野等により様々な「品質保証」がグラデーション的に存在するようになり、画一的な「品質保証」は形を変えつつある。AI時代も踏まえ「品質保証」の可視化の方法等、読み手が「取捨選択」ができるような仕組みを考え、実装していくことが必要。

知識の循環全体への貢献

- 具体的には、AI時代では、ナレッジに対して、何を統制メタデータとし、何を動的メタデータとし、何を触れないのか、の整理が改めて求められているのではないか。→ナレッジ全体を見渡せる図書館が、積み上げてきたその整理技術により貢献できることではないか

- 自ら多様なナレッジ公開の場を設けることも含め、知識の獲得支援を超え、知識の循環全体に関して図書館はまだまだ貢献できる可能性があると思っています！